

体育授業における潜在的「格差」構造の形成に関する研究

服部友紀

A Study of Hidden “Difference” under Structuralism in Physical Education

Yuki HATTORI

1. 問題と目的

現在、体育は子どもたちにとって最も人気のある教科である。ベネッセ教育研究開発センターの2006年に行われた第4回学習基本調査結果¹⁾によると、「体育」を好きな教科に挙げている小学生は84.9%、中学生は67.1%、高校生は、69.9%である。全教科の中で体育を好きな教科に挙げている子どもたちが最も多い。ところがこの結果を見てみると、中学生や高校生で「体育」を好きな子どもは小学生に比べて少ない。このことから、体育を好きな教科として挙げている子どもが減少していることがわかる。

実際の体育や体育授業に関連する言葉の中にも「体育嫌い」、「技能差」、「不得意」、「二極化」など一連の否定的な言葉で表わされる問題が多く取り上げられている。教師が積極的に子どもたちを育成しようとする営みがあるにも関わらず、否定的な認識が生じている。このような体育に対する否定的な認識は、子どもの集団の中に、体育が好きな子・嫌いな子、運動ができる子・できない子、体育で活躍できる子・できない子、などと格付けさせてしまうのではないかと考える。

一方、社会では経済による「格差」という問題が広く捉えられてきている。日本では2001年頃から一層深まっていった。「格差」には経済格差、

ジェンダー格差、教育格差など幅広く存在する。経済効率を上げて、経済を活発にしていこうとする試みや福祉政策によって人々の生活を豊かにしていこうとする試みがあるにも関わらず、貧困で生活に苦しむ人々が存在している。

体育授業においてもまた、社会問題の中の「格差」と同じような現象が起きていることが予想される。体育授業の中で「格差」という現象が起ってしまうのは、体育授業を行っている教師に問題があり、そこには隠された概念が存在しているのではないだろうか。体育事業の中の格差概念の構造を明らかにすることは、体育授業の改善に向けて意義があると考えられる。体育で否定的な認識を抱く子どもたちを生み出さないためにも、よりよい体育授業の在り方の視点を見出していきたい。

本研究では体育授業を「格差」という概念で構造的に捉えていくことを目的としている。本研究は二つの研究から構成されており、各研究の目的を以下に示す。

研究Ⅰでは文献を基に「格差」に関する文献の中から、キーワードを抽出する。そして、抽出したキーワードを体育授業に照らし合わせ、体育授業に関連する言葉へ読み替えていくことを目的とする。

研究Ⅱでは研究Ⅰの結果を基に、実際の体育授

業を観察し、「格差」概念を含むと考えられる場面を抽出する。そして場面を分類，比較，統合することによって，体育授業における新たな概念を産出していくことを目的とする。

2. 方法

研究Ⅰ：「格差」の一般概念を文献によって抽出する。抽出した一般概念からキーワードを抽出し，定義づけした後，体育事象や観念へ読み替える。さらに，そのキーワードを構造的な図に表わす。

対象文献：格差社会は主に経済学と社会学の視点で捉えられている。この二つの視点で捉えられた文献を選び，格差の一般概念を捉える。

研究Ⅱ：研究Ⅰで得た視点を基に体育授業を関与観察しフィールドノートを作成していく。その記述データから，体育授業の中に「格差」の現象がどのように現れているのかを検証し，概念を産出する。

(1) 研究対象，期間

愛知県S中学校，1，2，3年生
 期間…2009年10月13日から12月1日
 全22事例
 授業者…S中学校の体育教師2名
 単元…ソフトボール，長距離走，マット運動

(2) データ収集方法

関与観察によりフィールドノートを作成する。観察記述には，活動内容や教師の指示，評価，説明・助言やそれに対する生徒の反応，生徒の活動の様子を記録した。

(3) 分析方法

研究Ⅰから「格差」の視点として抽出したカテゴリーによって特定場面を抽出する。抽出した場面をカテゴリーごとに分類する。そして，カテゴリー内で類似場面を集め，概念化していく。その概念の関係を比較し，集約して統合概念を産出する。

3-1. 研究Ⅰ：「格差」概念の定義付け及びキー

ワード抽出

3-1-1. 「格差」の定義

経済学と社会学からそれぞれの視点で「格差」の概念を捉えることができる。

定義に関して，二つの学問から共通して言えることは，資源の分配（経済学なら賃金，社会学なら職業の威信）が不平等に行われることによって，人々の地位の序列化が起こり，優劣を固定させてしまうところに格差の要因となることが考えられる。よって，本研究では「格差」の概念の定義は以下のようにする。

「格差とは，様々な資源の不平等な分配によって序列化が生じ，固定化されている状態のこと」

3-1-2. 所得格差の要因

所得格差の要因では大きく二つの要因が挙げられている。

一つ目は不況による，雇用制度の変化や所得分配システムの変容が要因となる。

二つ目は，家族形態の変化とIT化，グローバル化にともなう仕事内容の変化が雇用体制を変化させていることが要因となる。

3-1-3. キーワードの抽出と定義付け

所得格差の要因を受けてキーワードを抽出する。

まず，格差は労働条件の違いから，正規労働者と非正規労働者などに賃金による差を生じさせることがわかる。よって，キーワードの一つを「賃金」とする。

自由で規制のない市場が，高い能力を有した生産性の高い労働者を生み出し，企業はそのような労働者を優遇する。橘木らは「機会の平等」に関して，「公平な参入機会」は仕事を上手くこなす能力や意思によって与えられるべきである²⁾と述べている。つまり，仕事を上手くこなす能力を持つ生産性の高い労働者は多くの参入機会を持つことができるが，生産性をあまり期待されていない労働者は参入機会を得ることができなくなってしまふ。

このような，市場経済に関わる能力や機会の差に加えて，IT社会，グローバル社会の進展によるオートメーション化，パソコンの発展などによって，様々な情報を取り扱う機会が増える。佐藤

はその時々で「優れた知識」とされているものをいち早く取り入れるエリートのことを「知識エリート」³⁾と称している。つまり、生産性の高い人と低い人では、情報や知識を得る機会にも差を生み出すのである。

よってこれらのことから「職能」、「情報」、「機会」という三つのキーワードを抽出する。

まとめると、一つ目は、賃金という資源分配の違いによって差が生じる。二つ目に仕事を上手く遂行することができる能力の違いによって差が生じる。三つ目に情報ネットワークを持っている人と持っていない人では生産性に差が生じる。そして、職務内容についての知識や仕事の方法や知識を持っているかどうか生産性に影響を及ぼす。四つ目に、能力開発の機会や情報を得る機会、企業参入機会に差が生じる。

この四つの点から、「賃金」、「職能」、「情報」、「機会」の四つのキーワードを抽出する。この四つのキーワードを定義付けると以下ようになる。

表1 キーワードの定義

キーワード	定義
賃金	働いた報酬として得られるもの
情報	職務内容についての資料や知識、仕事の方法や知識
職能	その職務を遂行する能力
機会	職務を遂行するのに好都合な時期

3-1-(4). 定義したキーワードの体育授業への読み替え

「評定」は体育授業では、評定をつける際、評価の観点に基づいてつけられる。

「情報」における評価は「評定」にも反映されてくる。「評定」が何かの手段として使用される場合、評価は報酬として与えられることになる。よって、「賃金」を「評定」という言葉に読み替える。

「格差」社会の中で出てくる「情報」は体育授業の中では、学習内容や学習方法に関わると考えられるため、「情報」という言葉に読み替える。

「格差」社会での「職能」は体育授業では、職務を学習課題のこととし、「技能・学び方」と読み替える。なお、「学び方」とは、学習行動の続きのことである。

「機会」は体育授業では、職務を学習内容のこととし、「機会」という言葉に読み替える。これらの読み替えたキーワードを定義付けると以下ようになる。

表2 体育授業の言葉への変換表

キーワード	体育授業	定義
賃金	評定	学習をして評価された報酬として得られるもの
情報	情報	学習内容についての資料や知識、学習の方法や知識
職能	技能・学び方	学習課題を達成することができる能力
機会	機会	学習内容を遂行するのに好都合な時期

3-1-(5). 定義したキーワードの構造図

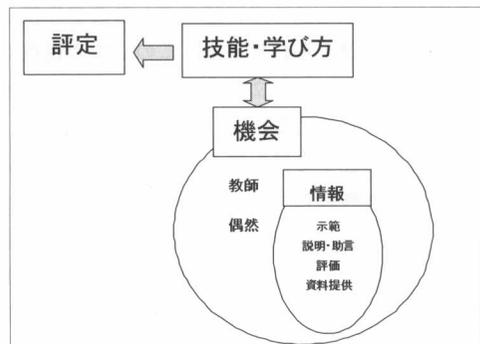


図1 体育授業における「格差」のキーワードの構造図

「技能・学び方」が向上すれば「評定」は良くなる。しかし、「技能・学び方」が向上しなければ「評定」は下がる。

「機会」は教師によって与えられるものと、偶発的に起こることが考えられる。良い「機会」が与えられれば、技能や学び方は向上する。逆に、「技能・学び方」が向上すれば、さらに良い「機会」を得ることができる。しかし、良い「機会」が与えられなければ、「技能・学び方」は向上しない。

「情報」には、示範や説明・助言、評価、資料提供などがある。「情報」は「機会」の中に含まれ、有効な「情報」がたくさん与えられる「機会」が増えると、「技能・学び方」が向上する。しかし、良い「情報」が与えられる「機会」が少なくなってしまうと、「技能・学び方」が向上できなくなってしまう。

3-2. 研究Ⅱ 実際の体育授業の分析と考察

3-2-(1). コーディングの結果

表3 コーディング結果

	場面番号	概念	共通概念	統合概念
1	評定-2	『結果の記録』	『結果の偏重』	『成果主義的アプローチ』
	評定-4	『結果の称賛』		
	情報-2	『結果の評価』		
	技能-2	『選別』		
	機会-5	『評価の認識機会』		
2	情報-1	『少量の運動課題』	『放任的指導』	
	情報-3	『技能習熟につながらない目標』		
	情報-5	『生徒の活動に生かされない視聴覚資料』		
	技能-10	『八方塞がり』		
	機会-7	『無責任な指導』		
3	技能-1	『経験不足』	『放任的指導』	
	技能-2	『危険』		
	技能-4	『無理解』		
	技能-3	『躊躇』		
4	技能-5	『否定的な態度』	『不適切な情報と機会の提供』	
	技能-6	『除外』		
	技能-7	『友人関係の亀裂』		
	技能-9	『態度の差異』		
	機会-4	『提供されない情報』		
5	機会-6	『活躍できない生徒』	『不適切な情報と機会の提供』	
	評定-1	『手段としての評価』		
	情報-4	『仇となる情報』		
	機会-2	『効率的悪い練習』		
	機会-3	『中断』		
6	技能-11	『教師の考え方の矛盾』	『不適切な情報と機会の提供』	
	評定-3	『達成できない目標』		
	機会-8	『目標達成の無機会』		
7	技能-8	『口頭による技術指導』	『不適切な情報と機会の提供』	
	機会-1	『不適切な機会』		

3-2-(2). コード化した概念の統合及び考察

実際の授業場面を観察したフィールドノートから、「格差」の場面を抽出し、四つのカテゴリーで分類した。そのカテゴリー内の中でさらに分類し概念化を行った。比較、統合の結果、三つの共通概念を抽出することができた。一つ目は『結果の偏重』、二つ目は『放任的指導』、三つ目は『不適切な情報や機会の提供』である。

『結果の偏重』とは、教師は生徒の学習活動の結果を重点的に見て、助言や評価を行っているということである。

例えば、マット運動では、倒立前転が「できるか・できないか」を見て評価しそれによって、グループ分けを行っていた。ソフトボールでは教師は試合中の捕球数や打球数などによって技能を見ていた。長距離走では、完走したことや最終タイムが速くなったことを評価していた。

これらのことから、教師は生徒の活動の最終形態を重点的に見ていて、生徒がどうしてできないのか、どんなところに困っているのかなどの途中経過を見ていないということが考えられる。

『放任的指導』とは、技能が未習熟であるにも関わらず、生徒の自主性に任せた指導が、生徒に様々な悪影響を及ぼしているということである。

例えば、ソフトボールの授業では、戦術の学習を行っていないために、ルールを知らない生徒は試合中何をやってよいのかわからず、困惑している。そして、試合に参加できず、傍観者になっていた。マット運動では、教師は特に技術的な指導はしない。生徒は倒立前転や跳び前転に果敢にチャレンジするが、恐怖のため途中で運動をやめてしまい、顔面から強打するなど怪我が絶えなかった。

これらのことから、教師が技能を高める機会や情報を積極的に与えていかなければ、怪我をする生徒や集団の中で孤立する生徒が出現してしまうと考えられる。

『不適切な情報と機会の提供』とは、生徒の技能水準に合っていない学習内容であっても、教師が立てた学習計画を生徒が達成できたかどうかという結果を重視している、ということである。

例えば、ソフトボールの授業では、教師は生徒が戦術を理解していないのに、各自で練習や試合をさせていた。マット運動では、シンクロマットの演技をみんなんで協力してつくるのが目標である。教師は曲をかけて、生徒が演技をつくりやすい環境をつくらうとしていた。しかし、生徒は曲に合わせて踊れるほど技能が高まっていないために、みんなでそろえて演技をすることは困難であった。

これらのことから、教師は、不適切な情報や機会の提供をしていても、できたところを重点的に見て、生徒が活動中に盛り上がっていればよいという結果を重視しているといえる。

以上のことから、教師は学習活動の価値ある結果を重点に置いて様々なアプローチをしているということがわかる。この理由により、統合概念として『成果主義的アプローチ』という概念を産出した。

4. まとめ

体育授業において、「格差」という現象が起こってしまうのは、子どもたちの能力や努力によるものというよりも、教師に何らかの原因があるといえよう。つまり、教師の中に潜在的に存在している概念の一つに『成果主義的アプローチ』とい

うものがあり、この成果に基づくアプローチこそ、子どもたちを格付けし、固定化させている要因であると考えられる。

体育授業を改善していくためには、教師が子どもたちの学習活動の成果に眼を向けることよりも、子どもたちの活動のプロセスに眼を向けていく必要があると考えられる。

教師は子どもたちがどのようなプロセスをたどって学習をしていったかを評価し、多様な手法で子どもたちに働きかけることによって、様々な能力を引き出していくことができよう。そして、教師がこの視点を持って体育授業を行うことで、子どもたちの体育に対する否定的な認識を減らしていくことにつながると期待する。

5. 引用・参考文献

- 1) ベネッセ教育開発センター：“第4回学習基本調査報告書・国内調査 第2章，第1節，1. 学校での学習の様子” ベネッセコーポレーション（参照2009-12-10）
小学生版
http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/syo/hon2_1_01.html
中学生版
http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/chu/hon2_1_1.html
高校生版
http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/kou/hon2_1_1.html
- 2) 刈谷剛彦，斉藤貴男，佐藤俊樹，橘木俊詔（編）「封印される不平等」pp.129-130（東洋経済新報社）東京都（2004）
- 3) 佐藤俊樹「不平等社会日本 さよなら総中流」p.160（中央公論新社）東京都（2000）
（指導教員 森 勇示）